

審査の結果の要旨

氏名 大野 直子

本研究は医療コミュニケーション・通訳理論に基づいた医療通訳養成システムを開発し、評価することであり、下記の結果を得ている。

1. 医療通訳に関する先行論文をレビューし、医療通訳養成に効果のある要素を明らかにした。Pubmed、PsycINFO、Cochrane Library、Google Scholar で、2005年10月～2010年12月までに掲載された原著論文を検索した。検索キーワードは以下のとおり：“Healthcare Interpreter” / “Healthcare Interpreters” / “Medical Interpreter” / “Medical Interpreters”。組入れ基準は(1)査読つき論文(2)医療通訳に必要な主要素について明確に述べているもの、とした。先行論文をレビューした結果、医療通訳に必要なスキルは①正確な通訳、②医療用語や人体に関する知識、③医療通訳倫理、④非言語コミュニケーションスキル、⑤異文化コミュニケーションスキルであった。これらスキルをトレーニングするため、通訳トレーニング、コミュニケーションスキル開発、医学知識開発の中から医療通訳に必要な教育方法を組み合わせ、3日間、計20時間の医療通訳養成システムを開発した。

2. 開発した医療通訳養成システムを用いて学習者への実験的介入を行った。参加者の組入れ基準は、18歳以上、TOEIC650点以上、以前に医療通訳研修受講経験がないこととし、参加者を介入/対照群にランダムに割り付けた上で、名古屋で3日間(20時間)のプログラムを行った。介入群は医療通訳プログラム、対照群は通訳プログラムを受講した。参加者は受講初日と最終日に、模擬医療面接および筆記試験を受けた。評価項目は通訳の質の変化、副次的評価項目は筆記テストおよび非言語コミュニケーションスキルの変化であった。介入群と対照群に、TOEICスコアにおいて有意差がみられたため、TOEICスコアを調整した結果を求めた。登録者は51名、年齢は22～62歳であった。評価対象者は43名であった。介入の結果について、TOEICスコア調整後、介入群において通訳の質の改善(言い足しミス減少($p=0.02$)、訳出したフレーズ数増加($p=0.03$))が有意に大きかった。また、筆記試験の得点の上昇も介入群が有意($p<0.001$)に高かった。非言語コミュニケーションスキルについては、有意差は認められなかった。

以上、本論文は医療コミュニケーション・通訳理論に基づいた医療通訳養成システムを開発し、評価し、一定の効果を得た。本システムは、文献レビューにより得た医療通訳養成に効果のある五要素に基づいて構築された、という点が独自である。本研究で行った、医療通訳養成システムの評価でランダム化比較試験の形式を用いたものはこれまでになく、医療通訳養成システム開発に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。